

近代ホスピス誕生の原点

—メアリー・エイケンヘッドの確信と活動—

宮坂 いち子

はじめに

終末期の人間が「如何にその人らしく暮らせるか」が「如何により良く死ぬるか」という問題と同一視され、クローズアップされる時代となった。生れて生きることが死で完了するというごく当たり前のことが、当たり前と捉えられなくなった現代には問題がある。人間の死に様を直視しなければより良い生は見出せないと訴えたのは、岡村昭彦¹⁾ (1929–1985) であった。彼は70年代のベトナム戦争に写真報道家として従軍し、彼の送った写真はアメリカのライフ誌に報道され、その悲惨な現場写真はアメリカの世論を動かして、戦争終結へのきっかけとなったと言われている。この岡村の書いた『ホスピスへの遠い道』は副題があり、「現代ホスピスのバックグラウンドを知るために」となっている。

ホスピスという呼び名は古くからあるものであり、中世の修道院に起源を持っている。中世のキリスト教者が聖地エルサレムへ巡礼する折、旅人の宿となったのが、修道院の中にある「巡礼者をもてなす場」である「ホスピス」であった。hospiceの語源はhostやhospitalityとも同源である。そこはまた旅人と当地の修道士や修道尼たちとの情報交換や旅人同士の団欒の場所でもあった。しかし巡礼の旅には病に罹る人、病で亡くなる人もあり、その看護や看取りから埋葬までの仕事もホスピスで行われた故に、hospitalという言葉にも繋がってくるのである。

昨今、現代ホスピス第1号と言われるのは、イギリスのセント・クリストファー・ホスピスである。1967年にロンドンにシシリー・ソングースにより設立され、不治の患者に対し、濃厚な治療を止め、人生の最後の痛みを和らげる「緩和治療に徹したい」と望む患者のためのケアを目指すものである。シシリー・ソングースの実現したモルヒネによる痛みの緩和治療が、今日のがん患者等のケアに如何に貢献しているかは周知のことである。しかしこのシシリー・ソングースを育てた病院は、ロンドンのセント・ジョセフ

病院であり、この病院の運営団体が、ダブリンで設立されたアイルランド慈善修道女会 (Irish Sisters of Charity) である。ところが、その創設者がマザー・メアリー・エイケンヘッドであったことは、多くの人には知られていない。ホスピスはイギリスから始まったと考えられている時に、岡村昭彦は「シシリー・ソングースからメアリー・エイケンヘッドへ」と原点を遡ろうとしたのである。彼の著書『ホスピスへの遠い道』により我々は初めて、メアリー・エイケンヘッドを詳細に知るきっかけを得ることが出来た。

メアリー・エイケンヘッドは中世の「巡礼者の宿」としてのホスピスから一歩進め、新たな概念を付加し「末期患者の死のケアの場」としてのホームを、1834年にアイルランドの首都ダブリンに創設したのである。19世紀のイギリス植民地のアイルランドに、なぜ近代ホスピスは誕生したのだろうか。

本論文では岡村昭彦の指摘と同時に、メアリー・エイケンヘッドに近代ホスピス第1号を設立させるに至った社会的・宗教的現実を、アイルランド人の神父ドナルD.ブレイクの書いた伝記²⁾を参考に解明したいと思う。

1. 宗教的対立

イギリスでホスピスという名称をつけた最初なのはセント・ジョセフ・ホスピスである。1905年に設立されている。歴史を逆に辿ってみるなら、それより20年前の1884年オーストラリアのシドニーに設立されたセークリット・ハート・ホスピスがある。そして近代最初のホスピスの原型はさらに50年前に、アイルランドのダブリンに1834年に出来たセント・ビンセント病院内のホスピス棟である。ここで時代を遡って辿って強調したかったのは、この近代のホスピスの3つの創設主体は皆「アイルランド慈善修道女会」だったことである。

筆者はこの3つの施設を訪問したが、本論文ではメア

リー自身が創設したセント・ビンセント病院の成立経緯を述べ、1787年から1858年という彼女の生きた時代において、何が彼女にこのホスピスという考えを実現させたいと思わせたのか追及しようというものである。その要因の一つは宗教的対立であったと思う。

アイルランドのキリスト教史は、キリスト教化された5世紀に始まる。ローマ人の奴隷として連れてこられた一人のキリスト教徒が、後にガリアで修行して、聖パトリック司教となって再びアイルランドに戻った時からである。「6, 7, 8世紀のアイルランドについて語ることは、アイルランドの教会やその聖者、学者について語ることであり、アイルランドの教会は熱烈で厳格、禁欲的、布教に意欲的、かつ学問的な教会という性格を持ち、次第に強力になり豊かになった。³⁾」教会はこうしてアイルランドのケルト人のキリスト教団の中心となり、修道院制度が大きな役割を果たしていった。9世紀になるとノルウェーのヴァイキングに幾度となく侵入されるが、アイルランドの人々はキリスト教以前の古い法や風習に対する忠実さを持ちながら、キリスト教を守り続けた。

しかしアイルランドの悲惨さは、互いに抗争する族長たちの集合体であって、統一国家がなかなか出来なかったことである。アイルランドはイギリスの隣国ゆえに植民地的状況であり、ノルマン人に侵攻された1169年からの生活は取り分け厳しいものとなった。アイルランド人は侵攻で奪われた土地を取り戻そうとして何度も反乱を企て、対立と融和が長年に亘り繰り返されたが、イングランドの支配下から解放されることは現代までなかったのである。

1536年にヘンリー8世が自らの離婚問題を契機にローマ・カトリック教会から完全に独立したことは、アイルランドに重大な影響を及ぼした。イングランドが独自の英国国教会を設立してから、アイルランドの苦難は政治的弾圧のみでなく、宗教的にも一層厳しいものとなった。イングランド、スコットランド、ウェールズはプロテスタントを徐々に受け入れたのに対し、アイルランドはカトリックを頑なに守り続けようとしたからである。ヘンリー8世はアイルランドの反乱を口実にアイルランドに出兵し、1536年に自らをアイルランド王と称したのである。

ローマ・カトリックと新教プロテスタントの争いは、16世紀から17世紀にかけてフランスのユグノー戦争、ドイツの30年戦争、イギリスのピューリタン革命等にも見られ、戦争の被害は住民の生活に多くの困難を課すものとなった。アイルランドにおいても最も血塗られた時代は17世紀であると言われる。カトリック教徒は1641年の武装蜂起で一時アイルランドの支配権を取り戻したが、1649年のオリ

バー・クロムウェルのアイルランド遠征により、支配権を失った。クロムウェルのアイルランド人への懲罰は実に厳しく、敗残兵や民衆の虐殺が行われ、ほぼ全てのカトリックの地主の土地が没収され、国教徒のイングランドからの入植者に与えられた。当時のアイルランドの人口の3分の1に当たる60万人が殺されるか、西インド諸島に奴隷に売られたという。こうしてクロムウェルの名は、アイルランドの虐殺者・迫害者として民衆の記憶の中に残ったのである。

さらに1689年のイギリスの名誉革命にもアイルランドが関わった。アイルランド・イングランド王であるカトリック教徒のジェームズ2世がイングランド議会で廃位され、オランダのウィリアム公がイングランド王位に無血で即位したことで、この革命は名誉革命と言われている。しかし、アイルランドのカトリック教徒はジェームズ2世の廃位を認めず、国内はカトリックとプロテスタントに二分して争った。しかしカトリックは敗れ、以後プロテスタントの支配は一層強化され、カトリック刑法も厳しくなっていた⁴⁾。

カトリック刑法というのはカトリック教徒の子弟教育の禁止、武器の使用の禁止、カトリック教徒の土地購入の禁止、カトリック教徒から選挙権、被選挙権の剥奪により、政府機関や法曹界で働くことを禁じるものである。カトリック教徒は暮らしの術を奪われ、差別と貧困の中での生活を余儀なくされたのであった。

2. 二つの宗派の狭間での養育

こうした状況の中でメアリー・エイケンヘッド（写真）はコーク市の最も栄えた大通りの一つグランド・パレイドに近いドント地区で1787年に生まれた。この地域は中産階級のプロテスタントの人々の多く住む地域であった。父のデイビッド・スタックポールは、裕福なスコットランド系のプロテスタントの医師で薬剤師でもあり、薬屋も開業していた。彼はプロテスタントであったが、グラタン議会に共鳴していた。グラタン議会は、ヘンリー・グラタン率いるアイルランド議会で、グラタン議会の構成員はプロテスタントの特権階



写真 Donal S.Blake著
『Mary Aikenhead (1789-1858) Servant of the Poor』
Founder of the Religious Sisters of Charity 2001より転載

級が多かったが、イギリスのアイルランドへの貿易不均衡の改善やアイルランド議会の尊重、カトリック教徒の政治参加等を訴えていた。

母のメアリー・スタックポールは、夫よりかなり歳が若く、名誉革命で財産をなくした商家出身のカトリック信者であった。当時両親の宗教が異なる場合、息子は父親の、娘は母親の宗教で育てられるのが習慣⁵⁾であったが、エイケンヘッド家は姉弟の4人の子供全てが、父親の宗教の英国国教会のプロテスタントで育てられた。

それゆえ娘のメアリーは1787年4月4日コークの英国国教会のシャンドン教会で洗礼を受けた。メアリーは幼時より喘息を持っていた。しかし彼女の生まれた家のドント地域は美しい港町であったが、霧や湿気が多く、健康に好ましくないとされる場所であった。それゆえメアリーは転地のため、コーク市の北部の健康に良い高台のイーソンズ・ヒルに住んでいるロック夫妻に預けられて養育されたのである。両親は毎週娘に会いに行き、父は近所の貧しい住民の訪問も行うドクターでもあった。ところが養父母のロック夫妻はカトリック信者であったので、メアリーはカトリックの教育の中で育つのである。これはカトリック信者であった母親の配慮からであったかもしれない。そして実の両親が暗黙の了解をしたかどうかは不明であるが、ロック夫人はメアリーにカトリックの洗礼を受けさせていたということである⁶⁾。

メアリーは6歳になるまでこの丘の上のロック家で育てられ、日曜日のビショップ・チャペル（カトリック）のミサに出席した。ある日曜日にシャンドン教会（プロテスタント）に向かう父の馬車とロック一家の馬車が出会うことがあった。父が車を止め、メアリーと一緒に教会に行こうと誘ったが、メアリーはロック家の者とチャペルに行くと言い、父も笑顔で別れたという。カトリックは「カトリック刑罰法」により、厳しい差別を受けており、主要通路に面して教会堂を立てることも鐘楼を設置することも禁じられていた。しかし、メアリーは偏見無く子供時代を貧しい人々の住むカトリック地域で過ごし、多くの貧しい人々と遊び友達となっていた。実家のグランド・パレイドに戻れば裕福な家庭の娘であり、イーソンズ・ヒルの丘の養父母の家に戻れば質素で聡明な娘であった。そして子供心にコークには貧しいカトリックの人々と、裕福なプロテスタントの人々の世界があることを感じていたのである。

6歳になった1793年にメアリーはドント地区の両親の家へ戻ってきた。既に妹アンとマーガレットが家族となっており、まもなく弟セント・ジョンも生まれた。実家に戻ってからはメアリーに対しプロテスタントの上流家庭の

教育が始まった。読み書きそろばん、フランス語、刺繍、音楽、ダンス等、社交界で若い淑女に必要とされる品位、礼儀作法等の教養が教え込まれた。頭に本を載せたままでの立ち居振る舞いや、上流社会のお客をもてなす作法も身につけ、教会でも年長者の一員としての待遇も受けるようになった。「襷のついた新品の白いドレス、淡い青の絹の帯でウエストを飾り、手袋をはめ、父から送られた装丁の良い祈祷書を握り⁷⁾」馬車に乗り教会に行った。英国国教会で示された席はクッション付き、足載せ台があり、周囲は上品に正装して着飾った紳士淑女の群れであった。ミサが終わって教会の外に出れば、父の友人の紳士淑女は愛情をこめてメアリーの魅力を褒めた。

この状況はメアリーには心とむものではなかった。シャンドン教会へ馬車で向かう途中で出会うビショップ・チャペルに向かう貧しい人々の群れ。イーソンズ・ヒルからやって来る昔の友人たちと出会う時、彼女は身の上について質問攻めにあいながら、挨拶を交わしていた。しかし納得のいかないものであり、彼女は父に様々な問いかけをせざるを得なかった。メアリーは相変わらず父と日曜日に教会に向かったが、心の中で考え続けながら、英国国教会の信徒として日々を過ごしていたのである。

ドクター・エイケンヘッド氏は、政治的には1790年に結成された秘密政治結社「統一アイルランド連盟」⁸⁾ (United Irishmen) に賛同していた。この結社はイギリスの支配から独立しようという反植民地活動を行っており、プロテスタント、カトリックの信仰に関わらず雇用を公平に取り扱うよう要求していた。しかしこの運動は1798年イギリス軍に鎮圧され、1801年にはグレートブリテン・アイルランド連合王国としてアイルランドはイギリスに併合された。タラの丘では400人が虐殺され、カトリック教徒の解放という公約も保留となった。

統一アイルランド連盟の指導者の中にはコーク生まれの人たちもいた。その中の一人エドワード・フィッツジェラルド卿はエイケンヘッド家に身を隠していたが、保安官とその部隊が近くまでやってきていることを知った父は、フィッツジェラルド卿が川を渡って逃げ延びるまでの時間稼ぎをし、保安官がドアを叩いた時は何事も無かった。有罪となる証拠は薬棚の処方箋の棚の引き出しに隠されていた。しかし、この頃、カトリック信者や活動家の鞭打ちや半吊りしの刑やさらし首が至る所で見られた状況下で、父が逮捕されず無事であったのは、生涯を通じての地域の人々への献身的な働きのお陰であった⁹⁾と言われる。

この反乱が鎮圧された後、宗教的、政治的問題に苦しんだ父は、診療所を売り出し、1799年環境の良いラトラン

ド通りに引っ越した。しかし、この頃既に重い病が体を蝕んでおり、病の最後のベッドでドクター・エイケンヘッド氏は、妻と同じカトリックに改宗し、1801年に亡くなったのである。メアリーが14歳の時であった。

父がカトリックに改宗したことでメアリーの決心は確実なものとなった。彼女は1802年6月6日15歳でカトリックに入信し、7月2日に堅信礼の秘蹟を受けた。メアリーは「私はカトリック信者になるまで決して幸せになれなかった。¹⁰⁾」とその後の手紙の中で書いている。

3. 貧困とホスピスへの道

熱心なカトリック教徒となった後、メアリーはなぜホスピス設立に向かったのか。この問いへの回答は社会の貧困であった。メアリーは父亡き後の家計を切り盛りしていたが、貧しい人々の苦しみは声は切実であった。とりわけカトリック信者は下層階級で、彼らの日々の生活は空腹と病と死と隣りあわせだったのである。

メアリーのような中流家庭のカトリックの若い女性たちは、こうした人々に食糧や衣類を配るセンターをコークに作り、メアリーもこのセンターに加わっていた。しかしもっと彼女は貧しい人々を直接助ける仕事に全生涯を捧げたかった。修道会は教会の外で活動することは禁じられていたが、チャンスは25歳になった1812年にやって来た。メアリーは新たな修道女会を創設するために、スコットランドのヨークにあるパール修道女会で修行することになったのである。メアリーの師のドクター・マレー枢機卿がヨークを選んだことは、理由があった。ヨークは古代ローマ時代から栄えた町であり、コンスタンチヌス帝が306年に東ローマ皇帝に即位したのはこの町であった。パール修道女会は反カトリック刑罰法下においてカトリック信者たちの拠り所であり、幾多の迫害の歴史を乗り越えてきたイグナチウス派の修道会であったのである。

1815年ヨークでの3年間の修行を終えダブリンに到着したメアリーは、マレー師がノース・ウィリアム通りに準備を整えた建物で最初の修道会の活動を開始した。1815年9月1日、メアリーは28歳で修道院長に任命される。全生涯を捧げた修道女としての出発であった。

1816年11月10日、ピウス7世の詔勅を受けとり、12月1日イエズス会のトロイ大司教によりReligious Sisters of Charity（慈善修道女会）が正式に創立された。これによりメアリーたちは史上初めて修道女が修道院の外に出て病人の家を訪問し、ダブリンで「歩く修道女」といわれるものが実現したのである。これは修道院史では初めてのことであった。

メアリーは修道女として町の貧しい病人たちを訪問すると共に、孤児院の面倒や、近くの学校での宗教教育の授業、女子処刑囚の訪問・看取り等も積極的に行った。こうした多忙さの中で、患者を訪問したシスター2名が病に感染して亡くなった。植民地下の社会の経済事情は厳しいものであり、彼女たちの生活も極貧を極め、オートミールのお粥のみが主食であった中で、1823年メアリー自身が遂に倒れた。絶対安静と6ヶ月の転地療養をしなければならなくなったのである。

1826年メアリーが39歳の時、生まれ故郷のコークに足を運び、この町に小さな修道院を新たに建てる仕事に半年間関った。この修道院は非常にみすばらしい建物で、メンバーはメアリーの妹アンを含めて4人で始められ、腸チフスが猛威を振るう中、病気が蔓延していたスラム街の訪問を開始した。しかし2人の修道女が重いチフスに罹り、妹のアンは肺結核になり、翌年亡くなった。またメアリーの病状も1831年脊髄の痛みを癌と診断され、過酷な治療によって悪化していた。

1832年44歳となったメアリーの病状は厳しいものであったが、一方アイルランド全体もコレラの大流行という災害に襲われた年であった。死亡率は80%に上ったと言われる。このコレラはアジアからヨーロッパ大陸を破壊的に襲い、衛生状態の悪いスラム街では死人が溢れた。ダブリンの町でも病院は収容不可能となり、仮設の病院を作り、慈善修道女会も病床でのメアリーの指導の下に、貧民街で黙々と任務に励んだのである。

1833年もコレラの蔓延で大変な年であったが、ローマ教皇グレゴリウス16世により、メアリーたちの慈善修道女会の憲章が、最終的に同意を与えられた喜ばしい年でもあった。慈善修道女会が創立し、ピウス7世に詔勅を得て以来17年を経っていたのである。

この頃のメアリーにとっての心配事は、先輩や同僚の修道女たちが結核、チフス、コレラに次々に罹り、早すぎる死を迎えることであった。彼女たちの活動の場が病の蔓延していたスラム街だったからである。慈善活動を継続するためにも、修道女たちの現実的な支援が急務であった。修道院や教会の入り口に押し寄せて倒れ死んでいく人たち、それを支える修道女たちの苦しみを見て、メアリーは修道女の運営する病院を作りたいという信念を益々強めたのである。

しかしアイルランドには国教会の信徒以外公職に付けない法律がある。公立の病院、学校はプロテスタントの管理下にあり、公立病院で亡くなるカトリックの者は、聖職者による最後の看取りも許されなかった。そうした状況下

で、メアリーがカトリックの修道会による病院を設立し、カトリック信者の医師と看護婦を養成したいと声を上げて、当初は寄付も集まらず、医師も見つからなかった。メアリーの希望は宗教に関らず、誰もが平等に医療を受けられることだけであったのであるが。

1833年やっと篤志家の支援で希望が芽生え、3人の修道女をパリのラ・ピティ・ホスピスに看護婦の見習いに派遣することが出来るようになった。又ダブリンのミース伯爵の邸宅を購入する資金を得て、1834年建物の所有権を得ることが出来た。メアリーはこの建物をセント・ビンセント・ド・ポール病院と命名したかった。セント・ビンセントとは1581年にフランスの農村に生まれた聖人である。メアリーが当初から病院の名前をこの聖人の名前にしたいと考えたのは、セント・ビンセントが宗教戦争の荒廃からフランスの貧者を救った状況が、アイルランドの状況と似ていたからであろう。

1834年にパリに行っていた3人の修道女が、当時最も近代的な病院で看護・介護の研修を受けて帰国した。メアリーの固い信念は「祖国での偏見を打破し、看護を一つの職業として確立すること¹¹⁾」であった。これはナイチンゲールがクリミア戦争に看護のために出かける1854年より20年も早く、英国看護協会が世界で初めて設立される1887年より50年も前になるのである。

その後、篤志家の寄付により、ベッド、シーツ、枕等の備品を整え、1835年の春に家族の引取り手の無い貧しい病気の女性のための12床が開院できたのである。これは英語圏で初めてのカトリックの修道女だけで運営される病院であった。メアリーの「貧しい患者のための幸せ」という目標がかなえられたのである。この頃メアリーは気管支炎の発作と肺や背骨の痛みに絶えず苦しめられ、車椅子でも動くことが苦痛になっていた。

1845年からのアイルランドの大飢饉は貧しい人々にさらなる苦しみをもたらした。主食のジャガイモが病気となり、収穫が全滅したのである。飢饉、疫病、立ち退き要求が日々の出来事であり、飢えた群衆は修道院に押しかけ、食糧や衣服を求めた。修道院の資金も底をついていたが、メアリーたちは各地に避難所を作り、食糧配給などを行い、殉教的な精神に支えられ乗り越えていったのである。

こうして絶えず貧しい人々のために心を砕きながら、メアリーは1858年7月22日、71歳でダブリンのハロルドズ・クロスで亡くなった。31日の国民新聞は「祖国アイルランドの貧しい人々は最良の友を亡くした。¹²⁾」と報じ、メアリーの死を悼んだと言う。彼女は今日ダニブルックの礼拝堂墓地に葬られている。

あとがき

マザー・エイケンヘッドの設立したアイルランド慈善修道女会は、ヨーロッパから忘れ去られていたオーストラリアに1838年に渡り、シドニーにセークリッド・ハート・ホスピス設立の基を創ることが出来た。またシスターたちはメアリー亡き後、イギリスのロンドンの貧困者の多いハックニー地区に、1906年セント・ジョセフ・ホスピスを設立している。そしてこの病院で勤務したシシリー・ソングースが、モルヒネによる疼痛緩和に基づく治療を実現したセント・クリストファー・ホスピスを設立したが、メアリーの慈善修道女会がなければ、イギリスにホスピスという思想は、誕生することは無かったかもしれない。

マザー・テレサが18歳で初めて修練女となって修行したのは、ロレット修道女会であったが、これはアイルランドの修道女会である。マザー・テレサが信念としていた貧しい者の中の最も貧しい者に仕えるために、「死に逝く人の家¹³⁾」というホスピスを創設したのも、メアリー・エイケンヘッドと同じくアイルランドの風土と歴史に深く関わっているのではないだろうか。これらの修道女たちが貧困と不平等の下で黙々と働きながら、しかし、生まれてきた者は誰もが愛を持って最後を看取られるべきだという精神を貫こうとしたことが、人間の尊厳と命の最後の安らぎの場としてのホスピスの誕生を可能にしたのだと思われる。

注)

- 1) 岡村昭彦『ホスピスへの遠い道』 春秋社 1999年
- 2) Donal S.Blake 著『Mary Aikenhead (1789-1858) Servant of the Poor』 Founder of the Religious Sisters of Charity 2001年
- 3) ルネ・フレシェ著『アイルランド』 白水社 2000年 p 21
- 4) ルネ・フレシェ著『アイルランド』 白水社 2000年 p 76
- 5) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p3
- 6) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p4
- 7) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p9
- 8) ルネ・フレシェ著『アイルランド』 白水社 2000年 p 85
- 9) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p11
- 10) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p15
- 11) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p56
- 12) Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead』 p93
- 13) マザー・テレサの「神の愛の宣教者会」が1952年インド政府の協力でカルカッタに開設したホスピス

参考文献

- 1.Mary Campion 著『THE MAKING OF HOSPICE』 1978年
- 2.Donal S. Blake 著『Mary Aikenhead(1789-1858) Servant of the Poor』 Founder of the Religious Sisters of Charity 2001年
- 3.ルネ・フレシェ 著 山口俊章 訳『アイルランド』 白水社 2000年
- 4.司馬遼太郎 著『愛蘭土紀行 I, II』 中公新書 2007年
- 5.岡村昭彦 著『ホスピスへの遠い道—現代ホスピスのバック

宮坂 いち子

グランドを知るために』春秋社 1999年

6. シシリー・ソンドース他編／岡村昭彦監訳『ホスピス—その
理念と運動』雲母書房 2006年